

福島市における祭礼空間の変容

松井圭介

キーワード：宗教組織，祭礼，観光化，福島市

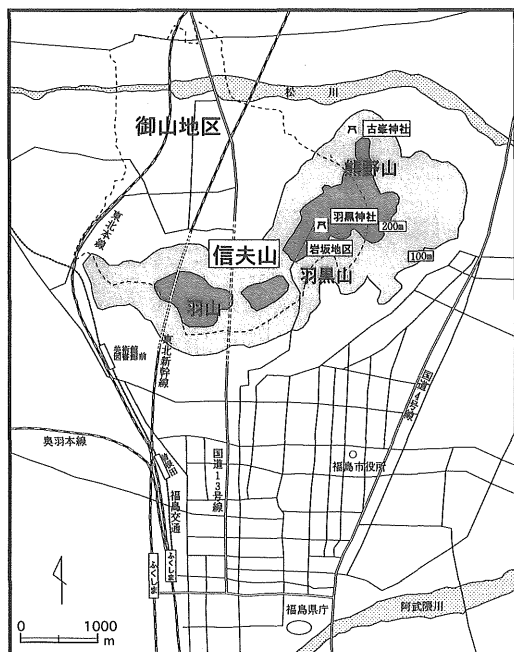
I はじめに

福島盆地のほぼ中央に位置する信夫山（しのぶやま）は、中央峰の羽黒山、東峰の熊野山、西峰の羽山などの総称であり、あわせて信夫三山とも呼ばれている（第1図）。周囲7km、海拔270メートル前後の丘陵状をなす山であり、別名御山（おやま）、青葉山とも呼ばれている。小丘ではあるが、福島盆地の中央部に位置する独立峰であるため、古くは女人禁制、肉食禁断の神聖な山として崇敬されていた¹⁾。山内からは文永・弘安時代（14世

紀）の板碑や古鏡をはじめとする出土品が発掘されており、信夫山が陸奥南半の羽黒修験を統括する本拠であったのではないかと推測されている²⁾。

信夫山は、現在では信仰の山、緑の山、憩いの山、文学の山などとして人々に知られている。山内には近世期の修験時代に由来する宗教施設が数多く分布するとともに、福島市をあげて行なわれる夏冬の祭礼は、信夫山に対する信仰と結びついており、福島市における有数の観光資源を提供している。しかしながら、松井（1996）でも指摘したように、宗教施設や史跡、祭礼が信夫山の観光資源に占める地位は相対的に低下しており、人々の求心力となる新しい祭礼が模索される時期が来ているといえる³⁾。

本稿では、この信夫山内・羽黒神社の参詣道に位置する福島市岩坂、谷、北坂、滝地区（地名はいずれも小字、以下中心集落の地名をとり岩坂地区と呼称）を事例に、福島市における祭礼空間⁴⁾の変容状況を明らかにする。岩坂地区は、現在では分家を含めて14軒が居住するに過ぎないが、近世期には戸数21軒が居住したといわれ、その大半が山伏かまたは社家であった⁵⁾。六供七官人と称される羽黒山大権現の供僧・社家の末裔の人々が居住する集落であり、当地区には近世期に由来する宗教組織が現存している。また岩坂地区を含む大字御山地区は、羽黒神社の氏子地域であり、岩坂地区の人々も氏子組織の中核を占めている。



第1図 研究対象地域

Ⅱ 福島市岩坂地区における宗教組織

Ⅱ-1 氏族単位の宗教組織

岩坂地区は中世期（13世紀の末頃）にはすでに山伏村を形成していた。この地域は、近世期には信夫山村と呼ばれ、戸数の大部分が山伏であったといわれている。西側の集落では、羽黒山への参詣道の両側に民家が並び、宿坊街を形成していた。これに対し、東側の集落では、二段に形成された平場に屋敷と耕地を開き、共同井戸を中心に民家が分布している⁶⁾。岩坂地区の主な家では、それぞれに奉持社を持ち、現在でも氏神として各奉持社である小祠を祭祀している。第2図は岩坂地区における旧六供・七官人の分布とそれぞれの奉持社の分布を示したものである。現在では山を下りた人も多く、六供では6軒中3軒が、七官人では7軒中2軒が、山内には居住していない。奉持社は屋敷に隣接している場合がほとんどであるが、いずれも羽黒山への参詣道沿いに分布している。各奉持社には祭礼日が定められており、祭礼が営まれている。

六供の一である〇家は、院号を祇園院といい、八坂神社（牛頭天王社）を奉斎している（写真1）。旧暦の6月14日が祭礼日である。当日は神官に御



写真1 〇家の奉持社

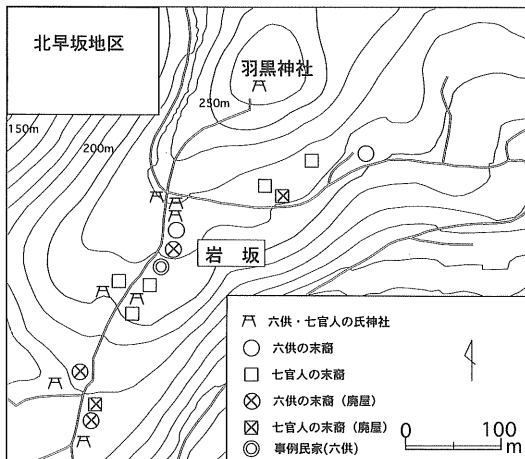
（1996年7月撮影）。

幣をきってもらい、初穂料をおさめる。〇家による牛頭天王の祭は、1960年代までは、一族の親類縁者が〇家に集まり、赤飯を炊いてご馳走をいただくという、〇家一族全体の祭礼であった。近年では一族が、祭礼日に集まることは困難であり、〇家が赤飯を各戸（8戸）に配布し、〇家の家族で直会（共同飲食）を行なっている。参道沿いにあるため、牛頭天王社には賽銭収入がある。年に1,000円ほどであり、祭礼の際の経費として用いられる。

Ⅱ-2 地区単位の宗教組織

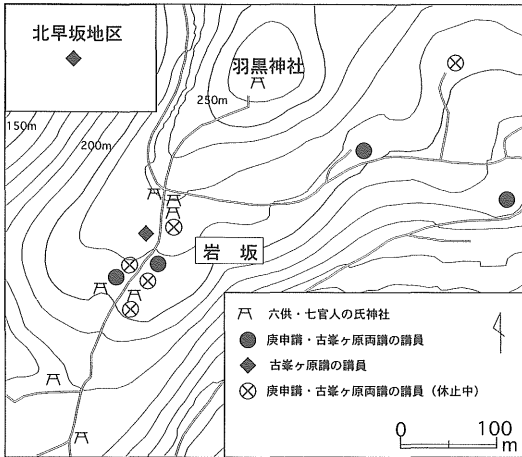
1) 古峰ヶ原（こぶがはら）講

岩坂地区の古峰ヶ原講は、12軒で組織されているが、現在の参加戸数は6軒である（第3図）。居住者が次第に山を下り、戸数が減少していくに伴って、古峰ヶ原講の参加戸数も減少している。講の世話役は、当前（とうまえ）と呼ばれ、講員による輪番である。講は2月18日に当前宅で行なわれる。当前宅のことを宿（やど）という。当前が保管している講帳によると、岩坂地区における古峰ヶ原講は、江戸時代より連綿と続けられていることがわかる。当前は、講員から当日に供する米（1kg）を事前に集めておく。当前には精進潔斎が求められる。以前には、講が始まる前に水垢離がとられていた。現在でも清めの意味を込めて入浴をする。当日は午前10時頃、講員が宿に集合



第2図 福島市岩坂地区における旧六供・七官人と奉持社の分布（1996年）

（現地調査より作成）。



第3図 福島市岩坂地区における古峰ヶ原講員と
庚申講員の分布 (1996年)
(現地調査より作成).

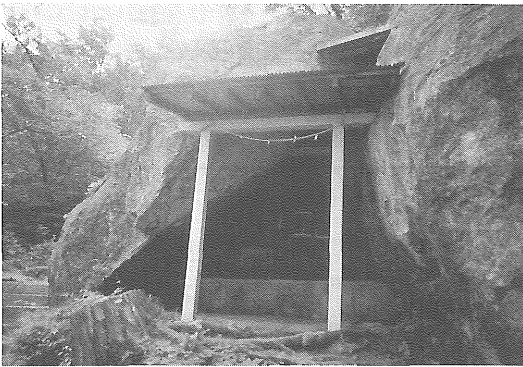


写真2 信夫山内にある古峰神社
(1996年7月撮影).

し、講員から集められた米をついて餅にする。その後砂糖、ゴボウ、味噌などを用いて調理した精進料理をいただく。以前はこれらの食材は、早番と呼ばれる講員の二人が、講に先立って買い出しをしていたが、現在では当前が準備をする。

昼食後14時頃に、山内にある古峰神社に参拝する(写真2)。参拝後再び宿で直会を行なう。直会は17時頃にお開きとなり講は終了する。講中では旗や幟を所有している。講の参加費は1,500円である。この内の1,000円は、祝詞をあげる神官に対する謝礼であり、500円は燈明料として当前のものとなる。

2) 庚申講

岩坂地区の庚申講は、現在ではわずかに4軒で組織されているにすぎない。明治期には10軒で組織されていたが、古峰ヶ原講と同様の理由で、講員は減少している。庚申講においても世話人は当前と呼ばれ、講員による輪番制である。講は毎年、2月の初申の日に行なわれる。夕方17時頃に、講員は宿へ参集する。講中では庚申様の掛軸を所有しており、講の当日には、宿で掛軸を下げ、講員がお題目を唱和する。その後直会が行なわれる。当前が時価5,000円相当の酒、サカナ、つまみ類を準備する。燈明料は1人500円である。

3) 鎮守とその祭礼組織

羽黒神社の氏子地域は、岩坂地区を含む大字御山地区にあたる(第1図)。羽黒神社は、信夫山の中央峰である羽黒山の頂上に祀られている社であり、信夫、伊達地方の総鎮守として人々の信仰を集めてきた。現社殿は1976年の焼失後の再建であり、文化財的な価値には乏しいが、新暦の2月10、11日に行なわれる信夫三山暁参り(以下暁参りと略す)では、長さ12メートル、重さ2トンにもなる大わらじが羽黒神社境内内の足尾神社に奉納される。御山地区では、御山敬神会が組織され、羽黒神社の祭礼である暁参りにおける実行委員の中核を担っている。この御山敬神会は、羽黒神社の氏子組織であるが、御山地区の全戸から組織されているのではなく、任意の団体である。現在は15~16名で組織されている。御山敬神会では、大わらじの製作や奉納など祭礼の中心的な行事を担当するが、暁参り全体の運営は、福島市の商工会議所会頭を長とする信夫三山奉賛会に担われている⁷⁾。御山敬神会が担当する行事は、2月の暁参りと8月の夏祭り(わらじまつり)である。

御山敬神会の年間スケジュールは以下の通りである。2月10日の暁参りの約1カ月前から本格的な準備にとりかかる。1月10日頃に、大わらじの原型となる骨組みを、前年に利用した大わらじから取り出すという作業が行なわれる。これを「わらじおろし」と呼んでいる。羽黒神社境内内に奉納されている大わらじ(写真3)を、ポールから



写真4 足尾神社に奉納されているわらじ
(1996年7月撮影)。

化するとともに、祭礼の本来有していた宗教的意味あいも薄れ、観光的色彩が強くなっていったものと考えられる。本来は氏子中として、わらじの受け手であった御山地区の住民が、わらじの作り手となったこと、わらじの市内巡行コースが定められ(第4図)、白衣を着けて天狗が先導する観光行事に変容していること、商工会議所や商店街連合会、福島市観光協会などとの共催を意味する奉賛会組織という形態をとっていること、など様々な点で祭礼の観光行事化が促進されていることが伺える。

この観光行事化の進展の最も顕著な例として、祭礼日の変更が指摘できる。旧正月14、15日に行なわれていた祭礼が新暦の2月10、11日に変更されたのは1983年である。祭礼日が変更された理由としては、次の二点が指摘される。第一に、1960年代に行なわれた新生活運動に伴う祭礼の新暦化運動、第二には、福島市商工会謝所の主導である¹⁴⁾。後者の目的は、参詣者の減少傾向に歯止めをかけ、祭礼参加者を確保することにあった。福島民報の記事によると、1970年代から80年代にかけて、わらじの担ぎ手が不足し、担ぎ手集めに苦労している様子が伺える¹⁵⁾。重さ2トンもある大わらじを担ぐには、交代人員を含めて約100名が必要であり、祭りが平日に行なわれる場合にはかなり困難であった。1979年には担ぎ手を集めることが出来ず、トラックによる奉納という事態

が生じることとなった。

また参加者数の激減も祭礼日変更の一因である¹⁶⁾。1951年には10万もの人出があったのに対し、1982年には1万人にまで減少しており、祭礼を休前日から休日にかけての二日間に固定することにより、参加者を確保しようという意味あいも含まれている。祭礼日の変更の際には、氏子や福島市商工会、市の関係者たちの中で論議がなされた。長年の慣習により旧暦で行なわれてきた祭礼日を変更することに対する抵抗は、氏子中では大きく、「神様が決めたことを人間が変えることが出来るのか」といった論議が繰り返されたという¹⁷⁾。しかしながら、結果的には興行的な日程が優先され、新暦の2月10、11日へと移行されることとなったのである。

暁参りの参加者が減少し始めた1970年に、福島の新しい夏祭りとして、わらじまつりが創出された¹⁸⁾。このわらじまつりは、1970年に当時の福島市商店街連合会の会長により、商店街の振興策の一環として立案・実行されたものである。日本一の大わらじを観光資源にし、暁参りを夏祭りで再現する試みであり、仙台・七夕、山形・花笠、秋田・竿灯、青森・ねぶたと並ぶ、東北五大祭の一つにしようという意図があった¹⁹⁾。暁参りで奉納される大わらじと合わせて一足になり、信仰的にも意味があると始まったわらじまつりは、毎年20万人前後の人出を集めてはいるものの、他の東北各県の祭りと比較すると、相対的に小規模に留まっているといえる。

福島市の祭礼は、信達地方の農民の信仰に機縁を有し、市の商工会や観光課と氏子組織が組織的に一体となって大規模化したものである。これらの祭礼は、都市商業の振興を目指した観光行事として毎年行なわれているものの、近年では参加者数が減少しており、祭礼の観光化は岐路に立たされているといえよう。

Ⅲ-3 祭礼変容の持つ意味

祭礼空間の変容の要因の一つとして、筆者は信夫山における聖性の衰退の影響を指摘したい。近

年まで信夫山には、聖域であるが故に数多くの禁忌（女人禁制や血忌・産忌など）が存在していた。明治期以降の国家の宗教政策をはじめとする社会環境の激変により、信夫山の聖域は確実に減少していった。山麓には住宅地が建設され、山腹は公園緑地化構想により、自然公園としての開発が計画されている。羽黒山頂に鎮座する羽黒神社にも確実に世俗化は進行している。参道はほぼ舗装化され、修験道の行場としての趣を残す岩盤の露出した宗教景観は、かつて結界がはられていた旧三ノ平より上部に残存しているに過ぎない。この三ノ平付近は、山内でも一級の難所であり、修験者の行場であった。これらの行場石には注連縄がはられていた。ところが暁参りにおける大わらじ奉納が巨大化してからは、岩盤は破壊され、戦後の観光行政のため現在では一切が破壊されている²⁰⁾。また羽黒神社の社殿も1976年に焼失し、現在ではコンクリート製の建造物になってしまった。祭礼が人々にとって魅力を有するには、その祭礼の基盤となる宗教自体が信仰を集めていることが重要である。祭礼・儀礼の齋行や信仰者による日常の参拝が途絶してしまっている現在では、信夫山の聖性に依拠していた暁参りの集客力が凋落するのは自然ともいえる。

このような状況にあって、信夫山の有する史跡や宗教施設、集落景観などを組み合わせて、新たな観光資源を生み出そうとする動きが、岩坂地区の人々の間でみられる。1996年の暁参りの当日（2月10日）に、羽黒神社参道沿いの空き家（旧六供宅）を利用して、「信夫山山伏村を見直す会」が「一日郷土資料館」を開設した。これは、岩坂地区の人々が中心になって、山伏の文化を見直し、新しい地域おこしのイベントを作ろうとしたものである。そこでは各家に伝わる古文書の展示や北限の柚を使った手作り料理が参拝客に振る舞われた。今後は山伏が食べていたと伝えられる精進料理の復活や参道を松明や篝火で照らす火まつりなどの企画も考えられている。この試みは、居住者が減少し、血縁や地縁を単位とした宗教組織の構成員も減少する中、山伏の末裔としての自覚を持つ岩

坂地区の住民による、地域おこしを目指した新しい形の祭礼であるといえよう。

Ⅳ おわりに

本稿では、福島市岩坂地区を事例に、祭礼空間の変容状況とその要因を検討してきたが、その結果から得られた知見は以下の通りである。

1) 岩坂地区は、中世期に淵源を有する山伏の末裔の集落であり、近世期には宿坊も営まれていた。各戸では血縁を単位とした奉持社（氏神）を祀り、地縁を単位とする古峰ヶ原講、庚申講がある。いずれも近世期から続く宗教組織であるが、近年では山内から都市部への転居による人口流出の影響もあり、構成員の減少が顕著である。

2) 岩坂地区の鎮守である羽黒神社の祭礼を変容という視点から見ると、祭礼回数の減少、祭礼時期の変更、観光行事化の進展の3点が指摘できる。羽黒神社の祭礼は、旧暦6月の夏祭りと同じく8月の八朔祭りが有名であった。しかしながら、両祭とも戦後には途絶し、現在まで行なわれている祭礼は暁参りだけである。信達地方の民間行事に機縁を持つ暁参りは、現代では巨大なわらじを奉納するという観光行事化の進展が顕著である。氏子組織を包摂する形で、市の商工会議所や観光課、企業と一体になった信夫三山奉賛会が組織されており、祭礼日も旧暦の小正月であったものが、新暦の2月10、11日に変更された。

3) 暁参りの観光行事化の進展とともに、福島市民の新しい夏祭りとして、1970年にわらじまつりが創出された。祭の目玉として大わらじが利用され、羽黒神社の氏子組織も、大わらじ製作の技術を買われて、祭に関与している。東北五大祭の一つにと願う地元商工会の期待ほど、観光資源としての魅力を有しているとはいえず、福島の祭礼は岐路に立っているといえる。

4) 祭礼空間の変容の要因の一つとして、信夫山における聖性の衰退の影響がある。大わらじ奉納のため岩盤が破壊されるといった現象に、象徴的に現れているように、信夫山からは宗教景観が

急速に減少している。羽黒神社への信仰者の参拝はほとんどなく、岩坂地区の人々に継承されていた宗教的禁忌も薄れている。近世期に山岳修験の山であった信夫山の聖性は、景観的にも、宗教儀礼的にも急速に衰退しているといえる。このような状況下で、岩坂地区の住民は、新しい地域おこ

しの試みとして1996年の暁参りの当日に、「一日郷土資料館」を開設した。これは信夫山の有する史跡や宗教施設、集落景観などを生かして、新たな観光資源を生み出そうという試みであり、地域に根ざした新しい祭の創出ともいえる。

現地調査に際しては、小野等二郎氏をはじめとする御山敬神会の皆様方および福島市商工会議所、福島市役所のご厚意とご協力をいただきました。また本稿執筆に当たっては、筑波大学地球科学系の佐々木博、斎藤 功教授を始めとする諸先生方に御指導を賜りました。以上記して厚く御礼申し上げます。なお本稿の作成には、文部省科学研究費（特別研究員奨励費1190）の一部を用いた。

[注および参考文献]

- 1) 平凡社地方資料センター編(1993):『日本歴史地名体系 第七巻 福島県の地名』,平凡社, pp611-612.
- 2) 福島県史編纂委員会編(1977):『福島県史21 文化2』, pp648-649.
- 3) 松井圭介(1996):信夫山の観光資源と利用形態. 日本観光学会誌, **29**, pp91-101.
筆者らは、都市商業の振興を目的とした祭礼がその意義を消失しつつある例として、茨城県結城市の調査も行なっている。
中川 正・松井圭介・田中達也・三木一彦・櫻井 誠・中村匡輝・小野寺 淳(1996):結城市中心部における都市空間の変容. 地域調査報告, **18**, pp23-43.
- 4) 本稿でいう祭礼空間とは、地域において組織される各種宗教組織および、各種宗教行事(祭礼, 儀礼など)が営まれる空間的範囲を意味する。
- 5) 前掲, 福島県史編纂委員会編(1977), pp649-650.
- 6) 梅宮 茂(1990):『信夫山めぐり』, 信楽社, pp58-59.
- 7) 信夫三山奉賛会は、信夫三山の宣伝に努め、観光客の誘致をはじめとする信夫三山に関する各種行事の運営を担うことを目的に、1957年に結成された。福島市商工会議所会頭を会長とし、福島市の商店街連合会長や各町内会長、福島市観光協会、地元企業代表などからなる組織である。
- 8) 平成8年度福島わらじ祭り実行委員会資料による。
- 9) 本章の歴史的記述に関しては、以下の文献によるところが大きい。
梅宮 茂(1987):『復刻版西坂茂 信夫山』, 蒼樹出版, 309p.
前掲6)110p.
- 10) 福島市史編纂委員会編(1981):『福島の民俗Ⅰ「福島市史」別巻Ⅲ』, 福島市教育委員会, pp342-343. この八朔祭りはもとは、羽山の祭であった。
前掲9)梅宮(1987).
- 11) 前掲2)pp640-641.
- 12) 正月5日に羽黒社の神輿が、黒沼社(山内に鎮座)に下り、神事御神楽が奏上され、7日に黒沼社より羽黒社へと還御し、翌8日から五穀成就の神事に入り、14日に結願になったという。
前掲2)pp50-51.
- 13) 前掲10)p.343.
- 14) 福島市史編纂委員会編(1991):『福島市史資料叢書——昭和の福島Ⅹ——』, 福島市教育委員会, pp237-238.
- 15) 福島民報, 1981年2月8日県北版, 同, 1982年2月3日県北版, 同, 1982年2月5日県北版.
- 16) 福島市史編纂委員会編(1986):『福島市史資料叢書——昭和の福島Ⅵ——』, 福島市教育委員会,

pp224-225. および福島民報, 1982年2月9日県北版.

17) 聞きとりによる.

18) この夏祭りは, II-1で述べた羽黒神社の本祭であった夏祭りとは無関係である.

19) 福島市史編纂委員会編(1996):『福島市史資料叢書——昭和の福島 XV——』, 福島市教育委員会,
pp186-187.

20) 前掲2)pp36-39.